

令和 7 年度

岩倉市小中学生平和祈念派遣事業報告書



派遣日 令和7年8月5日(火)～8月6日(水)

○ はじめに「“ヒロシマの心”をつなぐ」	[1]
○ 令和7年度岩倉市小中学生平和祈念派遣事業	[2]
○ 事前学習会	[4]
○ 折鶴預託式・結団式	[5]
○ 広島派遣	[6]
○ 岩倉市平和祈念戦没者追悼式	[10]
○ 岩倉市平和祈念派遣事業報告会	[11]

【小学生団員】

「つなぐバトン」	黒 川 恭 文	〔岩倉北小〕	[12]
「広島で学んだ平和の大切さ」	島 田 秀 哉	〔岩倉南小〕	[13]
「負の遺産の存在を未来へ」	宇津木 奏	〔岩倉東小〕	[14]
「平和を繋ぐバトン」	廣 瀬 莉 歩	〔五条川小〕	[15]
「今私が平和のためにできること」	柴 田 栞 那	〔曾野小〕	[16]

【中学生団員】

「伝えよう原爆の恐ろしさ」	今 井 亜 優	〔岩倉中〕	[17]
「あたりまえ」	坂 口 穂 夏	〔岩倉中〕	[19]
「あの日を忘れないために」	高 木 優 衣	〔岩倉中〕	[21]
「遠い過去ではない」	内 藤 八重子	〔岩倉中〕	[23]
「平和へのバトン」	吉 川 友 喜	〔岩倉中〕	[25]
「原爆の怖さ、平和の尊さ」	岩 岸 翔 大	〔南部中〕	[27]
「託される物」	南 端 俊 賢	〔南部中〕	[29]
「今の当たり前にある平和に感謝を」	田 辺 未 來	〔南部中〕	[31]
「平和な今を生きるために」	久 野 そよ香	〔南部中〕	[33]

○ おわりに	[35]
--------	------



はじめに

～平和を願う「ヒロシマの心」～

令和7年8月5日(火)、6日(水)の2日間、岩倉市小中学生平和祈念派遣団として、中学生9名小学生5名、引率者3名の計17名を広島市に派遣していただきました。猛暑の中の広島でしたが、市民の皆さんから預託された折り鶴を原爆の子の像に献納しました。その後、平和祈念資料館で1歳半の時に被爆された岡本忠さんから話を伺いました。手足や頭にやけどを負ったこと、家が損壊し親戚の小屋での生活、食糧難、電気のない生活などの話を聞きました。本当は辛くて思い出したくない記憶を伝えてくださる岡本さんから「核兵器は人類にとって最悪なもの」と言われたことが強く心に残りました。その後、ボランティアガイドさんのもと原爆ドームなど平和公園内やその周辺を見学しました。また原爆資料館を見学し、子どもたちは原爆被害の事実を自分たちなりに受け止めているようでした。



8月6日(水)朝、平和公園で行われた「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和記念式」に参加しました。厳粛な雰囲気の中での式典で、松井広島市長は「自分よりも



他社の立場を重視する考え方を優先することが大切であり、そうすることで人類は多くの混乱や紛争を解決し、現在に至っている。国家は自国のことのみに専念して他国を無視してはならない。」と世界に訴えかけました。また、子ども代表のスピーチでは「世界では、今もどこかで戦争が起きている。そこでは大切な人を失い、生きることに絶望している人々がたくさんいる。その事実を自分のこととして考え、平和について関心をもつこと、多様性を認め、相手のことを理解しようとする、一人一人が相手の考えに寄り添い、思いやりの心で話し合うこ

とが大切である。」という誓いの言葉がありました。

2日間を平和で豊かな広島で過ごした私たちですが、広島街全体が「80年前を決して忘れない。次世代にこの記憶を伝えていかなければならない」と訴えているようでした。

このような貴重な機会を与えていただいた岩倉市教育委員会を始め、関係各位に深く感謝します。ありがとうございました。

令和7年8月吉日

岩倉市小中学生平和祈念派遣団長
岩倉市立岩倉南小学校長 宮崎 健治

令和7年度 岩倉市小中学生平和祈念派遣事業

1 目 的

核兵器の犠牲により多大な被害を被った広島市に小中学生を派遣することにより、原爆の恐ろしさや戦争の悲惨さ、無意味さを知り、平和を愛し、強く願う気持ちを育てるとともに、平和のために今自分に何ができるのかを考えさせる。

2 派遣者

No.	学 校 名	氏 名	ふ り が な	学 年	性 別
1	岩倉北小学校	黒川 恭文	くろかわ たかふみ	小 6	男
2	岩倉南小学校	島田 秀哉	しまだ しゅうや	小 6	男
3	岩倉東小学校	宇津木 奏	うつぎ かなで	小 6	女
4	五条川小学校	廣瀬 莉歩	ひろせ りほ	小 6	女
5	曾野小学校	柴田 栞那	しばた かなな	小 6	女
6	岩倉中学校	今井 亜優	いまい あゆ	中 3	女
7	岩倉中学校	坂口 穂夏	さかぐち ほのか	中 3	女
8	岩倉中学校	高木 優衣	たかぎ ゆい	中 3	女
9	岩倉中学校	内藤 八重子	ないとう やえこ	中 3	女
10	岩倉中学校	吉川 友喜	よしかわ ゆうき	中 3	女
11	南部中学校	岩岸 翔大	いわぎし しょうた	中 3	男
12	南部中学校	南端 俊賢	みなみばた としかつ	中 3	男
13	南部中学校	田辺 未来	たなべ みく	中 3	女
14	南部中学校	久野 そよ香	ひさの そよか	中 3	女
15	岩倉南小学校	宮崎 健治	みやざき けんじ	団 長	男
16	岩倉中学校	田口 雄一	たぐち ゆういち	副団長	男
17	岩倉南小学校	樋口 珠実	ひぐち たまみ	引 率	女

3 派遣先 広島県広島市

4 派遣日 令和7年8月5日（火）～ 8月6日（水）

5 主たる活動内容

- （1）広島市平和記念公園で開催される平和祈念式典に参列する。
- （2）平和記念資料館や平和記念公園、原爆ドームを訪れ、広島市における被爆の実態をつぶさに見学し、あわせて被爆体験者からその時の様子を聞く体験を通して、被爆の恐ろしさや悲惨さを学び、平和の意義を実体験する。
- （3）事前の学習会や事後の報告会を開催し、自身の平和祈念に対する意識を高めるとともに、学校での平和報告会を通して、全児童生徒に現地での活動の内容や平和祈念への思いを環流する。

6 活動の実際

月 日	曜	活 動	内 容	備 考
5 月上旬		各校代表児童生徒選考	小 5 名・中 9 名 計 1 4 名	各小中学校
6 月中旬 		全校集会 学年集会	平和祈念派遣の目的 主な活動内容の紹介	各小中学校
7 月中旬		折鶴制作	折鶴の制作	各小中学校
7 月 1 8 日	金	事前学習会	参加者の顔合わせ・事前学習 役割分担・日程や持ち物の確認	岩倉南小
7 月 2 5 日	金	折鶴預託式・結団式	折鶴預託と派遣団の結団式	市役所
8 月 5 日	火	広島市現地見学	平和記念公園、原爆の子の像、折鶴 献納、被爆者講話、平和記念資料館、 原爆ドーム	広島市
8 月 6 日	水	平和祈念式典参列 広島市現地見学	平和祈念式典参列、厳島神社（宮島） 見学	平和公園 廿日市市
8 月 1 5 日	金	岩倉市平和祈念戦没者追 悼式参列（リハあり）	岩倉市平和祈念戦没者追悼式参列 平和へのメッセージ朗読（代表 2 名）	アテリア総合体 育文化センター
8 月 2 6 日	火	事後報告会	派遣団員の事後報告	市役所
9 月～		平和祈念派遣報告会	校内環流活動【現地での活動内容・ 平和祈念派遣の意義とその役割】	各小中学校

7 派遣日程

（1）8月5日（火）

鉄道—— 船～～ バス・タクシー＝＝ 徒歩・・

<u>集合8:10 岩倉駅改札口前</u>		【のぞみ 11 号（弁当）】			タクシー		見学	
岩倉駅【名鉄】一名鉄名古屋駅・・名古屋駅——広島駅・・相鉄フレッサイン広島駅前＝ <u>平和記念公園・原爆の子の像</u>								
8:32	8:47	9:10	11:27	11:40	11:45	12:05	12:15	12:45
見学（被爆者講話）		見学			【広島電鉄】		（夕食）（入 浴・就 寝）	
<u>平和記念資料館</u> ・・ <u>原爆ドーム・平和記念資料館</u> ＝原爆ドーム前駅——広島駅・・お好み物語駅前広場・・ホテル								
12:55	14:00	14:15	17:30 頃		17:50 頃	18:00	19:00	19:10

（2）8月6日（水）

(弁当) タクシー		※平和祈念式典参列 バス				見学(昼食: だいこん屋)	
ホテル発		＝原爆ドーム・・		平和記念公園	＝厳島港(宮島口) ～～ 厳島港(宮島)・・		厳島神社・・ 厳島港(宮島)
6:35	6:45	7:00	9:00		9:35	9:45	12:50 13:10
バス		【のぞみ 100 号】				<u>解散 18:10 岩倉駅改札口前</u>	
～～ 厳島港(宮島)＝		ホテル・・・		広島駅	―― 名古屋駅・・ 名鉄名古屋駅――		岩倉駅
13:20	13:50	14:00	15:03	17:19	17:41	17:55	

令和7年度 岩倉市小中学生平和祈念派遣団 事前学習会

令和7年7月18日（金）
於 岩倉市立岩倉南小学校

令和7年7月18日（金）14時、岩倉南小学校に、岩倉市内の小中学校から集まった代表児童生徒14人と、引率職員3人が顔をそろえました。広島への平和祈念派遣を前に行われた事前学習会でした。子どもたちは緊張と期待が交差したような表情でした。

冒頭の自己紹介では、声の大きさや視線にぎこちなさが残る一方、相手の話を最後まで聞こうとする姿勢が際立ちました。続くアイスブレイクでは、簡単なゲームを通じて互いに声を掛け合い、笑顔が自然と増えていく。最初は遠慮がちだった輪の中に、小さな「うなずき」と「ありがとう」が生まれ、空気がやわらいだ瞬間がはっきりとありました。

行程説明では、配付されたしおりを片手に、宿泊先や持ち物、服装の確認を丁寧に進めました。集合時刻に印を付ける児童、持参品ページに書き込みをする生徒、いずれも、自分の責任で準備する、という強い意志が見て取れました。メモを取りながら真剣にうなずく姿に心強さを感じました。

続いて、過去の派遣団の活動を記録したDVDを視聴しました。資料館での静かなまなざし、被爆の証言に耳を澄ます先輩たちの姿が映し出されると、会議室の空気は一段と引き締まりました。単なる見学の旅ではなく、「学び、伝える」ために広島へ向かうのだという目的意識が、確かに育っていました。



その後、「広島平和祈念式典」や主な見学地について調べてきたことを発表し合って距離を縮めました。短い時間でしたが、派遣団員の間に仲間意識と、広島での学びに対する明確な目的意識が芽生えた事前学習会となりました。



折鶴預託式・派遣団結団式

7月25日（金）岩倉市役所にて

平和への願いが込められた折鶴を、市役所にて託されました。そして、派遣団一人一人が平和派遣に対する強い決意を述べました。



代表として参加するという自覚をもち、原爆の恐ろしさや悲惨さを、しっかりと目を見て、心で感じてきます。

平和のために自分たちができることは何かを考え、岩倉の人たちへ伝えられるように、多くのことを学んでいきます。

【岩倉市小中学校平和祈念派遣団 広島派遣の記録】

—8月5日 平和を学び、祈り、受け継ぐ—

原爆の子の像に折り鶴をささげて

広島到着後、最初に訪れたのは「原爆の子の像」でした。像の周囲には、全国から届けられた折り鶴が色とりどりに積み重なり、平和を願う人々の思いであふれていました。岩倉市の小中学生も市民から託された折り鶴を手し、心を込めて奉納しました。それぞれの折り鶴には「戦争のない世界を」という願いが込められていました。



被爆者の講話から学ぶ

続いて広島市交流文化会館で被爆者の方からお話を伺いました。講師の方は、当時わずか1歳5か月で被爆し、今も体にその痕跡を残されていました。

「家や財産を失い、飢えと貧しさの中で生きました。皆さん、自分にできることを考え、実践し、受け継いでいってください。」

と語られる言葉に、子どもたちは真剣に耳を傾け、ノートやタブレットに記録しました。そして、自分たちが戦争や原爆の恐ろしさを伝えていかなければいけないと感じていました。



平和記念公園を巡って

午後は、ガイドの案内で平和記念公園内を巡りました。80年前の悲劇の場所を巡り、一瞬で多くの人命が奪われたことを知り、心を痛めました。原爆投下の爆心地に立ち、焼けただれた石に触れると、ざらざらとした感触から熱線の恐ろしさを実感しました。



平和記念資料館で「本物」と出会う

最後に訪れた広島平和記念資料館では、被爆前の街の姿と、一瞬で焼き尽くされた街の写真や遺品を目にしました。

ある生徒は「爆風で飛ばされたトタン板が、布のように変形していて、説明を読むまで金属だとは分からなかった」と驚きを語りました。学習で知っていたことと「本物に触れること」の違いを全員が強く感じました。



【岩倉市小中学校平和祈念派遣団 広島派遣の記録】

—8月6日 平和記念式典に参列し、祈りを受け継ぐ—

平和記念式典に出発

2日目の朝、子どもたちは午前5時に起床しました。タクシーに分乗し、会場である広島平和記念公園へ。到着したのは午前7時前。すでに世界各国から集まった多くの人々で会場は埋め尽くされていました。式典開始を待つ間、子どもたちは静かに流れる時間を感じ取りながら、この特別な一日に心を整えました。



平和記念式典

午前8時、厳粛な空気の中で平和記念式典が始まりました。

- 広島市長の平和宣言

「私たち市民は、決して諦めることなく、真に平和な世界の実現に向けて、核兵器廃絶への思いを市民社会の総意にしていかなければならない。」



- 子ども代表による「平和への誓い」

「世界では今も戦争が起きています。大切な人を失い、生きることに絶望している人々がたくさんいます。」



- 内閣総理大臣挨拶

「非核三原則を堅持しながら『核兵器のない世界』に向けた取組を主導することは、唯一の戦争被爆国である我が国の使命です。」

- 広島県知事挨拶

「核抑止が益々重要だと声高に叫ぶ人たちがいます。しかし、本当にそうなのでしょうか。」

テレビ中継では幾度も目にしてきた式典。しかし、その場に実際に身を置き、耳で直接言葉を受け取る体験は、子どもたちに強い印象を残しました。

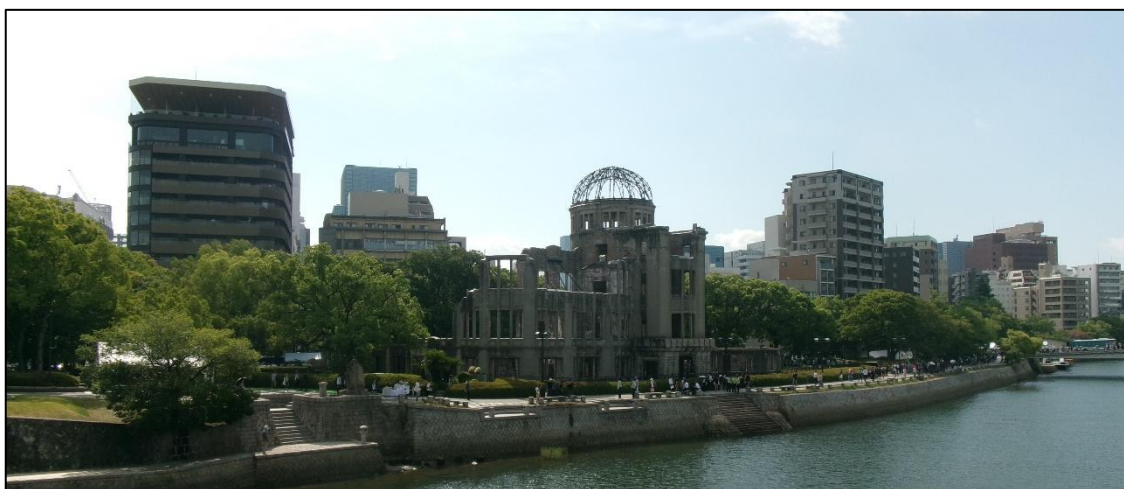


子どもたちの気づきと誓い

「平和は一瞬にして壊れてしまう。だからこそ、平和を守るために努力が必要だ。」

「そのために、自分にできることは何だろう。」

子どもたちは式典を通して、自ら問いを立て、平和に向けた行動を考え始めました。学びひたるように心で感じ、思考し、未来に向けて受け継ぐ決意を強めた一日でした。



岩倉市平和祈念戦没者追悼式

8月15日(金)



広島での学びとともに、派遣団全員の思い込めて
「平和へのメッセージ」を作成しました。

平和へのメッセージ

八十年前の八月六日、午前八時十五分、一発の原子爆弾が広島を襲いました。この原爆により多くの命が奪われ、八十年経った今でも、原爆の後遺症で苦しんでいる方がたくさんいます。

今回、私たちは岩倉市小中学生平和祈念派遣団として、広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式に参加し、被爆者の岡本さんの話を聞き、今もなお残る体の傷跡を見て、原爆の恐怖がそこにあったことを実感しました。気づく間もなく一瞬にして亡くなった人、皮膚が爛れ苦しみながらゆっくりと亡くなった人、生き延びたが差別を受けて心に深い傷を負った人、たくさんの苦しみ

がそこにはありました。今、私たちは毎日を平和に過ごすことができていること、当たり前ではないのです。今回の広島平和派遣の活動から、私たちが目で見て肌で感じたことを、学校の友達や家族に伝え、平和のバトンを繋いでいくことが大切だと感じました。

岩倉市平和祈念戦没者追悼式に参加するにあたり、過去に起きた出来事を忘れず、戦争の悲惨さと平和の尊さを語り継ぐ言葉で、次の世代へ平和を紡いでいくことをここに誓います。

令和七年八月十五日

岩倉市小中学生平和祈念派遣団
代表 岩倉中学校 吉川 友喜
南部中学校 岩岸 翔大

平和祈念派遣事業報告会

令和7年8月26日

於 岩倉市役所会議室

「数字ではなく“一人の命”として」 広島で得た実感を次へつなぐ



事後報告会では、子どもたちの口から「当たり前の暮らしの尊さ」と「体験を語り継ぐ責任」が、静かに、しかし力強く語られました。

「写真を前に言葉が出なかった」ある生徒は展示の前で立ちすくんだ瞬間を振り返り、「これからは自分から戦争について学びたい」と続けました。別の生徒は、広島に行く前は被害を「統計の数字」として受け止めていたが、遺品や手紙、証言に触れ、「顔のある一人の人生」として実感したと報告しました。

「被爆証言では、岡本さんの言葉が心に残りました。体験のバトンを次の世代に必ず渡します」高齢化が進むなか、語り継ぎの担い手を自分たちが引き受ける番だと、複数の生徒が誓いました。資料館では、複製資料やCG映像を通じて、日常の時間が一瞬で断ち切られた現実を学び、「家族と食卓を囲む」「友達と過ごす」といった日常が、どれほど脆く、そして尊いかに思い至りました。

子どもたちの言葉の端々に「実感が行動を生む」手応えを見ました。凄惨さから目を背けず、見て・聞いて・考えたことを自分の言葉で伝えようとする姿勢が、確かに芽生えていました。

会の締めくくりで、ある生徒はこう語りました。「平和は特別な誰かに任せるものではなく、私たち一人ひとりの毎日の態度から始まる」小さな対立を認め合う、身近な人を思いやる—そんな日常の選択が、未来の安全網になると思います。

「数字」ではなく「一人」。その視点の転換は、二日間の学びが確かに子どもたちの中に根づいた証でした。

つなぐバトン

岩倉北小学校 黒 川 恭 文

今から 80 年前 1945 年 8 月 6 日 8 時 15 分、広島に原子爆弾が落とされました。原子爆弾が投下された時、1 歳 5 ヶ月だった岡本さんには被爆した時の記憶はなく、傷だけが体に残っています。被爆した時のことは母や叔父から聞いたそうです。岡本さんは、被爆した時の傷を恥ずかしく感じて隠していましたが、傷の治療をしてくれていた医師から、「私の娘に原爆のことを伝えたい。傷の写真を撮らせてくれ」と言われました。その言葉に岡本さんは「自分の傷は不幸だけではない。後世に原爆の恐ろしさを伝えられるバトンになる」と気づき、それ以降、傷を隠すことをやめたそうです。

被爆者の方には不安がたくさんありました。大量の放射線を浴びているので、いつどのように原爆症を発症するか分かりません。また、生まれてくる自分の子供も原爆症を発症するリスクがあり、そもそも健康に生まれてくるのかという不安もあります。被爆者の方だけでなく、被爆者の家族も常にこのような不安を感じています。

原子爆弾が投下されてから 80 年、時が経つにつれ被爆者の方の高齢化は進んでいます。たくさんの不安を抱えている岡本さんが強い願いとして伝えてくれたことは「これ以上核兵器によるヒバクシャを増やさないこと」と「被爆の体験談というバトンを受け取った人は必ず次の人につないでいく」というものでした。岡本さんはこれからも核兵器廃絶と平和の尊さを強く訴えていくそうです。

私たちが、貴重な体験談というバトンをしっかりを受け取り、次の世代につないでいくことが必要だと思います。さまざまな人が持っていた夢を一瞬にして壊した争いは二度と起こしてはいけないということ、家族や友達と過ごす当たり前の毎日こそ大切にしなければいけないということを改めて感じました。当たり前の毎日に感謝するとともに、周りの人たちと一緒に戦争や核兵器のない平和な世界を創っていくにはどうすればよいのか考えていきます。



広島で学んだ平和の大切さ

岩倉南小学校 島田 秀哉

僕は平和派遣団の一員として2日間広島を訪れ、原爆が人々に与えた影響やその後の生活の変化について学びました。1日目に訪れた広島平和記念資料館では、原爆が多くの人々に与えた苦しみを、写真や展示物を通して知ることができました。

1945年8月6日午前8時15分、原爆「リトルボーイ」が広島島の島病院上空600mで爆発し、半径2km以内の家屋はほとんど倒壊し、多くの人が熱線や放射能の影響で命を落としました。



資料館には、原爆の凄まじい熱で融合したガラス食器や変形した瓶、焦げて黒くなった弁当箱や水筒などが展示されていました。また、背中と両腕にケロイドができた被爆者の写真、思わず目を背けたくなるような絵がたくさんあって、悲惨な光景が目に見え、胸が締め付けられるような気持ちになりました。

広島に落ちた、たった一発の原爆がこれほどの威力で、さらに放射線の影響で、癌や白血病になる人もいたという話を聞き、とても信じられませんでした。



この日、被爆者の岡本さんのお話も聞きました。1歳5ヶ月の時に原爆が落とされ、倒壊した家の下敷きになったそうです。母親に助け出され命は助かったものの、後遺症が残り、生活は貧しく大変なものだったそうです。たとえ生き延びても、苦しみを続ける原爆や戦争は絶対に繰り返してはならないと強く思いました。

2日目の平和祈念式典では、「原爆死没者名簿奉納」が一番心に残りました。約34万人分の名前が書かれた名簿が130冊もあり、どれだけ多くの命が突然奪われたのか、そして今もなお記録され続けていることに、平和の大切さを実感しました。

この2日間を通して、原爆がもたらした苦しみは、想像を超えるものだと感じました。世界には12,441発の核兵器が存在し、今すぐにでも使うことのできる核兵器が3,900発以上もあるそうです。

広島や長崎の悲劇を繰り返さないために、僕たちは戦争の恐ろしさや平和の大切さを周りの人や次の世代に伝えていくことが大切だと強く思います。そして、核兵器も戦争もない平和な世界をつくるために、これからの自分にできることは何かを考え、行動していきたいです。

負の遺産の存在を未来へ

岩倉東小学校 宇津木 奏

「リトル・ボーイ」それが8時15分、広島県広島市に投下された原子爆弾の名前でした。長さ約3メートル、直径約0.7メートル、重さ約4トン。たった一つのこの爆弾により、一瞬にして10万を優に超える、尊い命が犠牲となりました。その後さらに被害を大きくしたのが「被爆症」です。これは放射線によって、被爆してから発症する病です。発症するのは1年後かもしれないし、10年後かもしれません。症状は白血病、ケロイド、がんなど、多岐に渡ります。これにより現在も原爆死没者が増えています。

被爆者の中には「被爆した」ことを理由に結婚を反対され一生独身を貫いたり、子や孫に放射線による影響が出ないか、びくびくしながら暮らしたりしている方もいらっしゃると聞きました。罪のない人たちが、なぜこんな目に遭わなければならないのか、とやるせない気持ちになり、核兵器廃絶を訴えている人たちの気持ちが分かりました。

平和祈念資料館に行くと、目に入ったのは、目を背けたくなるような、絵、写真。そして、原型のない、または焦げている服、お弁当、ガラス瓶などでした。その服などを、当時人が身に着けていて、それがこうなったってことは…。



【原爆で焼けたワンピース】

そう想像し、とても怖くなりました。今の日本が、安全で、平和でよかったと心の底から感じました。それと同時に、今戦争をしている国々に戦争をやめてほしいと直接伝えたいくなりました。

現在、世界には核兵器が12,241発あります。そのうち配備済みのものが3,912発。核兵器を一つ使えば大勢の人が亡くなり、環境にも大きな悪影響を及ぼします。そんな危険なものが、地球上にこんなにたくさん。地球と人類を壊すものをなぜ作り、使うのか、理解できませんでした。

被爆者の平均年齢は86歳を超え、年々減り続けている中、私たちは直接お話を聞く機会に恵まれました。「被爆者のいない世界」それは、遠い未来ではないと、強く感じました。そして「戦争」の情報をできるだけ多く、未来へ伝えなければと実感しました。そんな中、被爆者の岡本さんがおっしゃった、「平和とはなにか」という考えが、心に残りました。岡本さんにとって平和とは、みんなでつくるもの。一人でもつくれず、二人でもつけれない。平和の大切さをみんなに伝えるため、思い出したくないくらい過去を伝え続けています。私たちにできることはその貴重な機会を無駄にせず、次世代の人たちに、ここで得たことを伝えることだと、そう思いました。

広島に落とされた原子爆弾。それによってもたらされた負の遺産。これらの存在を未来へ伝え、誰もが「戦争」の悲惨さと無意味さを知り、「平和」を望み、実現する世界を目指していきたいです。

平和を繋ぐバトン

五条川小学校 廣 瀬 莉 歩

私は人類史上初めて原子爆弾が落とされた広島へ行き、原爆の怖さ、そして毎日のように話していた家族や友達が突然亡くなってしまう戦争の恐ろしさを改めて知ることができた。

原爆の威力は強く恐ろしいものだとは知っていたが、原爆資料館などを回り、自分が思っていたよりも何倍も被害があり、たくさんの悲しみや苦しみを生んだことに気付かされた。また、いつ爆弾が落ちてくるか分からなくて、毎日が心配と恐怖でいっぱいだったことも知った。私とその状況なら動けなくなり何もできなくなってしまうと思う。そう思うと、そこにいた人々の心配でたまらない気持ちがさらに分かるような気がした。



私は被爆者の岡本さんにこんなことを聞いた。「あなたにとって平和とはなんですか。」岡本さんは「こうやって原爆や戦争についての話を語り継ぐことが平和」「けがも病気もしない日々がずっと続くことが平和」と言っていた。私には、「原爆や戦争について語り継ぐことで世界が平和になる」と、岡本さん自身がなにより願っているからそう言ったんだと感じられた。さらに「今日聞いたこと、見たこと、感じたことを忘れないで家族や友達、知り合いに話し伝えてください」とも言っていた。そして「受け取ったバトンは必ず次の人にパスして繋いでほしい」とも。私は、岡本さんの言葉の中でこの言葉が一番響いた。それは事実を語り継いでいくこと、被爆者達の思いを繋いでいくこと、それらを次の世代へ繋いでいくということにとっても共感したからだ。



この二日間で私は、広島と長崎に原爆が落とされ何があったのかを世界中の人に知ってもらふこと、周りや自分とは違う人がいてもまずはお互いのことを認め合い、話し合うことが大切で必要だと思った。また、自分で見たり聞いたりして実際に戦争の恐ろしさを知り、感じる事が今を生きる私たちの戦争体験だと私は思う。そして、戦争や原爆について伝えたり、今自分が何をしたらいいのかを考えたりしたことを行動に移し、たくされたバトンを多くの人へ繋ぐことが平和な世界をつくるために必要だと思う。

今私が平和のためにできること

曾野小学校 柴 田 栞 那

私は、これまで広島は原爆によって、「大きな被害を受けた」という事実しか知りませんでした。今回、広島に行って一番に感じたことは、原爆の恐ろしさです。平和記念資料館の展示の中で、私が衝撃を受けたものは、私よりも小さい子が描いた原爆の絵です。小さい子が描く絵は、かわいい絵を想像しますが、血を流した人やけがをした人が、這いつくばっていたり、歩いていたいたりしていた絵が描いてありました。この絵を小さな子が描いたのだと思うと、原爆の恐ろしさが、私には想像できないほどのもので鳥肌が立ちました。



そして、被爆者の岡本さんの話も聞かせていただき、原爆は、多くの人の命を奪っただけでなく、数年経っても、被爆者には原爆症の心配や悩みがあったことも知り、多くの人をものすごく苦しめたものだったことが分かりました。岡本さんのお話の中で、「原爆が落とされたのは80年前だが、原爆の話絶対に昔の話にしてはいけない。今、世界には12,000発の核兵器があるのだから。」という言葉が一番心に残りました。広島や長崎に投下された原爆によってどれだけ多くの人を苦しめるものなのか分かっているのに、核兵器はまだ世界にたくさんあるのです。これは、許してはならないことだと私は思いました。



今、私は何不自由なく平和に暮らすことができます。しかし、80年前の広島で、原爆によって、こんなにも恐ろしいことが起こったのだと思うと、とても怖くて悲しくなります。もう二度とこんなことが起こらないように、今、私にできることは、被爆者の岡本さんの話や原爆資料館で見た原爆の被害をまだ知らない人に伝えていくことだと思います。私が見てきたこと聞いたことをもとに、少しでも多くの人に原爆の悲惨さを伝え、平和の大切さを一緒に考えていきたいです。

伝えよう原爆の恐ろしさ

岩倉中学校 今 井 亜 優

1945年8月6日午前8時15分広島に世界で初めて原爆が落とされました。その原爆で広島に住む多くの人の命が失われました。放射線という目には見えないもので、原爆から生き延びた後も被爆した人の生活を苦しめました。その被害に遭った人たちは今でも差別に苦しんでいます。私はこの平和派遣に行くまでは「原爆によって多くの命が失われた」ということと「放射線」という言葉しか知らなくてそれがどんな病気かも知りませんでした。でもこの平和派遣を通して原爆の被害がどれだけ大きかったか、放射線がどれだけ多くの人たちを不安にさせたかが分かりました。それから私の原爆や平和についての考えがこの派遣を通して変わっていきました。この体験を通して私が心に残ったことは二つあります。

一つ目は広島平和記念資料館です。ここには被爆した人の当時の物から被害にあった人や広島の町の写真がありました。その中でも一番心に残ったのは、男の子が持っていた弁当箱です。真っ黒に焦げていて、分かるのは弁当箱の形だけでした。その弁当箱が展示してある横には「いつもお母さんの作ったご飯を食べる時が1日の楽しみだ」と書かれていました。その言葉を読



んだ時、私も戦争の時に生きていたら同じことを思っていて毎日怯えながら暮らしていると思いました。他にも火傷した人の写真や皮膚が溶けてそれが固まって目が見えなくなっている人の写真、皮膚がただれていて助けを求める人たちの絵、生き残っても一生消えることのない被爆者の人の傷の写真、引き裂かれている服もありました。それを見た時は言葉が出ませんでした。痛そうという言葉では表せないくらい残酷で悲しいと思いました。見ているだけでも心が苦しくなったり悲しくなったりして、もう二度と戦争が世界中で起こってほしくないと強く思いました。

二つ目は岡本忠さんのお話です。原爆が落とされた時の広島のこと

や自分がどう生きてきたかについて詳しく話してくれました。原爆が落とされた時の広島の様子は瓦礫や電柱が道路に散乱していて、道がどっち向きか分からないくらいだと言っていました。岡本さんのお母



さんが見た光景は、いろんなところで火が上がっていて、原爆が落とされた日の午後2時から3時の間が一番燃えていたと言っていました。その時は街が火の海で、3日で全て燃えたそうです。家の中に閉じ込められていた人は亡くなっていて、熱線の影響で体全体が火傷していて顔がパンパンに腫れていた人もいたと言っていました。熱線は3秒で消えても一瞬で地面を3,000度にしたそうです。私は、熱線がどんな被害を与えたのか分からなかったけれど、岡本さんの話を聞いて、一瞬で地面の温度を上げたり、人を一瞬で火傷にしたり、人を黒くしてしまったりするということが分かりました。それがどれほど高温だったかについても教えてもらいました。お墓に案内され、実際に原爆が落とされた時に熱線を浴びたお墓を見ました。普通はツルツルしている墓石が、熱線を浴びたところは表面がザラザラしていました。それに触れることで、熱線がどれだけ恐ろしいものかが分かりました。さらに、岡本さんは、原爆の被害にあったからの生活についても教えてくださいました。お父さんの兄弟の家がある田舎に疎開しても、自分達が生活するのに大変だから家には最初の数日しか泊まらせてもらえなかったと言っていました。その後は小屋とかで過ごしたり、お父さんが見つけた電気のない家で過ごしてきたりしたそうです。毎日お昼は学校で弁当を食べていたけれど、そのご飯は麦飯で、周りの目が気になっていつも隠れて食べていたと言っていました。

私は今回、自分がどれだけ恵まれていて、幸せな生活ができているのかを改めて実感することができました。この平和派遣で学んだ、戦争や原爆の悲しさや平和の大切さを、私たちが家族や学校のみんなに伝えていきたいと思いました。そして「学ぶ・知る」ことの大事さも分かりました。「あたりまえ」が急に「あたりまえじゃなくなる」そういう時が急に訪れる。そうなるこの原爆のように復興や被害が治るまでに長い年月がかかるかもしれない。そんなことがもう二度と起こらないためにも、まず一人一人が学んで知ることが大切だと思いました。

1945年8月6日に史上初めてとなる原子爆弾が落とされました。熱線によりたった3秒という短い間で、多くの大切な命が奪われました。生き残った被爆者は、体に残った痕跡の悩み、結婚と子供達の出産の悩みなど、さまざまな悩みを抱えながら生きています。今回広島に行く機会を与えてもらい原爆の恐ろしさを身にしみて感じることができました。中でも印象に残っていることは三つあります。

一つ目は、被爆者である岡本さんの被爆体験講演でのお話です。岡本さんは当時1歳で、親戚に当時のことを聞いても教えてもらえなかったと仰っていました。それを聞き、被爆体験者にとってそれだけ思い出したくない日のことだと感じました。岡本さんの母、叔父が書いた被爆当時のことについて書いてあるメモをもとに教えてもらいました。熱線により衣服は引き裂け、皮膚はたれ下がり、負傷者たちは列になり両手を前にして逃げたっていったそうです。私はその当時の様子を想像するだけで、これまで感じたことのない恐怖や悲慘さを感じました。被爆後の人生も貧しい生活を送り、特に食事は小豆色で黒っぽい麦飯が主食だったそうです。岡本さんは、小学校でそれを食べることがとても嫌だった、食べる時は両手で隠すぐらい恥ずかしかったと話していました。家族と友達と一緒にいられることの幸せ、三食しっかり食べることができる幸せなど、あたりまえであることの幸せを、講話を通して改めて実感することができました。

二つ目は、広島平和記念資料館で当時の写真や被爆者の使っていた私物、衣類などの展示を見たことです。私は「弁当箱、水筒」「ワンピース」が印象に残りました。

「弁当箱、水筒」では当時中学一年生だった子が被爆し、骨になった状態で母親が見つけた時の物で、お弁当を楽しみに出かけましたが、それを食べることができなかったとのこと。お弁当を楽しみにしていた中、食べることができず、この世を去ってしまったことや、自分の子供が骨の姿となって見つかったことの悲しみなど、当時について考えるだけでもとても残酷な状況だったのだなと思いました。「ワンピース」

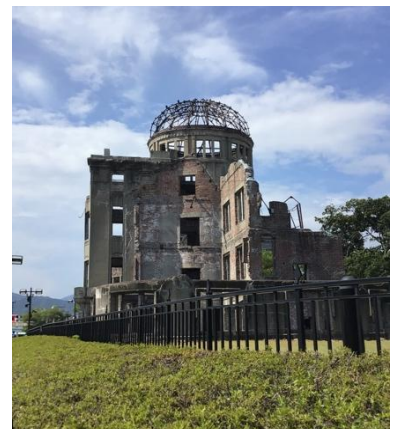


は無数のガラス片が刺さり亡くなってしまった時に来ていた服でした。そのワンピースは血液の後が変色して残っていました。洗濯するとボロボロになるため父がそのまま保管していたそうです。服は、血だらけで何箇所も穴が空いていました。その服を見てとても衝撃を受け、当時のことを想像したくないほどの過酷な状態でした。



三つ目は、平和記念式典に参列したことです。平和記念式典では、子供代表の関口さんと佐々木さんが平和の誓いで「たとえ一つの声でも、学んだ事実思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができるはずですよ」という言葉が心に残りました。それを聞き、原爆の恐ろしさについて考えたり、どうしたら戦争がなくなるのかを考えたりすることなど、少しでも戦争について知ることが重要だと改めて感じました。また、今回の平和記念式典は過去最多となる120カ国が参列したそうです。国籍を問わず被爆者へ1分間の黙祷を捧げていました。

この2日間を通して、平和とはどれだけ大切で、あたりまえではないことに改めて気付かされました。あたりまえだった日常がたった3秒で壊され、いつも一緒にいた家族、友達と一生会えなくなったり、住んでいた家や街が一瞬にして壊されたりすることは、どれだけ怖いものなのかを深く考える機会になりました。被爆者が高齢化し、直接聞ける機会が少なくなっている中、広島に住んでいる人の思いなど、たくさん自分の目で見て、自分の耳で聴いて確かめることができたとても貴重な経験になりました。何があっても核兵器はあってはならないもの、平和とは何か、どうしたら平和になるのかを考えること、あたりまえである日常は当たり前ではないことなど、一人一人が戦争や原爆について考えることが大切だと感じました。



戦争があったという過去は変えられません。そして今もどこかで戦争が起きています。戦争は絶対にあってはならないことです。私たちは戦争と無縁ではないことを自覚し、そんな世界が変わっていけるように、今回で学んだことを家族や友達に伝えていき、語り継いでいけるような存在になりたいです。

あの日を忘れないために

岩倉中学校 高 木 優 衣

毎年8月6日、午前8時15分に広島で黙とうが捧げられます。今から80年前のこの日のこの時間に、世界で初めて広島に原子爆弾が投下されました。

私は、社会科の授業で、戦争が起こった歴史的背景や戦後の人々の生活について学習し、この平和派遣を通してさらに知識を深め、今の自分にできることを考え、平和について自分の口から語れるようになりたいという思いで派遣に参加しました。

私たちは実際に、被爆者の岡本さんから当時の様子について聞くことができました。たった一発の原爆で町中が焼け野原になり、約4,000度の熱線により皮膚がただれた人々、多くの叫び声。あたりまえの日常があたりまえではなくなり、原爆は一瞬にして人々の幸せを奪っていったのです。



被爆者の岡本さんは当時1歳で、記憶には残っていないけれど、原爆によってできた傷が残っています。住んでいた家は跡形もなく燃え尽き、電気、食料、衣服などがない貧しい生活が待ち受けていました。投下時に着ていた服を着続けていくために、ボロボロになった服を何度も直すなど、その一着をととても大切にしていたそうです。その後も、被爆者への偏見が絶えなかったり、後遺症に苦しんでいる人がいたり、自分の子供への遺伝など、不安なことは大人になってからもたくさんあると聞きました。あの日の事を経験した人は、いろんな不安を一生抱えながら生きていかなければなかったのだと分かりました。

私はこのお話を聞いて、「原子爆弾」は人々が思う以上に恐ろしく、あたりまえにあった幸せが一瞬で壊れるものだと実感しました。戦後80年。被爆者は減ってきています。今後もこのことを幅広い世代に伝え続けていくことが、今の私たちにできることだと思いました。その



後、広島平和記念資料館を訪れました。今度は自分の目で原爆の悲惨さについて学びました。火傷により皮膚がただれてしまった人々の写真が多くありました。顔は変形し、誰なのかも分からない状態でした。自分自身や家族、友人がそのような姿になってしまうと考えると胸が苦しくなりました。他にも、8時15分で止まった時計、その日食べるはずだったお弁当、血だらけになりながらも必死で逃げたことが分かる衣服などが展示されていました。まるで自分が実際に80年前の広島にいるよ

うな感覚になりました。その中で、私が特に印象に残っている言葉があります。それは、「頬に涙が伝い、ファインダーを通す情景がうるんだ。まさに地獄だ」この言葉から、当時の人々の気持ちがとても伝わってきました。カメラのファインダー越しに見える光景があまりにも悲惨でそれはまさに「地獄」で、きっと、涙で滲んだ視界だったのだろうと感じました。もう一つ、「真っ赤、いや違う、黒味がかかった朱色、そんな気もする」という言葉がありました。最初は理解することが難しかったけれど、よく考えるとその意味が分かりました。「真っ赤」と最初に思ったけれど、よく見ると少し違う、「黒味がかかった朱色」と訂正しているのは、ただの鮮やかな赤ではなく、少し暗い赤。つまり、血や焼けこげたものを連想させる色に言い換えたのだと気付きました。この「真っ赤、いや違う…」という迷いは、衝撃的な光景を目にしている最中の人々の視点をリアルに伝えていました。

広島平和記念資料館は、原爆を経験していない私たちにとって、想像の中では決して辿り着けない「地獄」をリアルに感じられる場所でした。展示されている写真や遺品、その一つ一つが当時の人々の苦しみや、必死に生き抜こうという強い想いを表していました。平和の尊さと命の重みを、自分ごととして考え続けること。それが、未来に託された私たちの責任だと思いました。

被爆者がこの世からいなくなる時が近づいています。この先、原爆の恐ろしさについて語ることでできる人がいなくなったらどうなると思いますか？あの日起こった出来事を、多くの人がよく知らないまま生きていくことになるでしょう。絶対に忘れてはいけない出来事だからこそ、多くの人がある事実を知り、今後も語り継いでいく必要があります。そのために、私たちは核兵器の恐ろしさをもっと知るべきです。現在も世界には恐ろしい程の威力をもつ核兵器が存在しています。そんな中で、今も世界のどこかで戦争が起きています。もし、今ある「幸せ」が一瞬で奪われたとしたら、私は生きる希望さえ失ってしまうと思います。これまでに、このような感情を抱き、苦しんでいた人々がたくさんいたこと、そして今もいることを絶対に心に留めておくべきです。幸せな毎日を送ることができている私たちだからこそ、立場を自分に置き換えてみるのが大切です。そして、広島で受け取ったバトンを今後も繋いでいくために、まずは家族や友人に自分が肌で感じてきたことを伝え、それからもっと多くの人に原爆の恐ろしさと平和の尊さを広めていきたいです。あの日を忘れないために。



遠い過去ではない

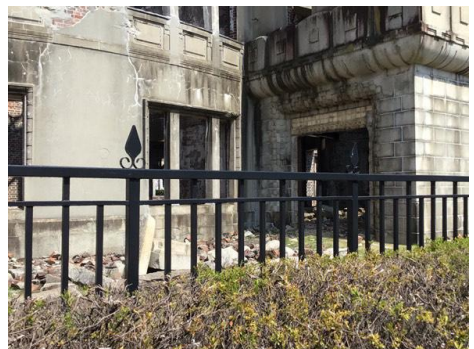
岩倉中学校 内 藤 八重子

1945年8月6日午前8時15分。広島街に人類史上初めて原子爆弾が投下されました。広島街は一瞬にして焼け野原になり、人々から命、家族、生活など、かけがえのないものを無差別に奪いました。そして、惨禍の中を生き延びた後も心身共に癒えることのない傷を負い、不安を抱えながら生活を送っている人がいます。

私はこれまで、戦争や原爆は、本来奪われるはずのない命が奪われ、たくさんの人々の心に深い深い傷をつけるものであり、決して繰り返してはいけないことだという認識でありながら、どこか自分ごととして考えることができませんでした。遠い出来事のように感じてしまう意識を変えたいと思い、平和派遣に参加させていただきました。

1日目、私たちは1歳の時に被爆した岡本さんのお話を聞かせていただきました。お話の中で、「核兵器は人類の生存を脅かす、本当に恐ろしいものです。世界から核兵器をなくすことが被爆者の私の願いです」という言葉がありました。核兵器は瞬時にさまざまなものを奪い、破壊し、長期にわたって人々を苦しめ続けます。二度と世界で使用されることがあってはいけないと強く感じました。しかし、今日では、他国の軍事行為への「抑止力」のために、世界に約1万2720発の核爆弾が存在しています。広島と長崎で使用された、たった2発の原子爆弾で21万を超える人々が亡くなっています。本当に恐ろしい数が存在しているのです。全ての核兵器の根絶を目指して、唯一の被爆国である日本が声を上げ、悲劇の全てを伝え続けることの重要性を再確認することができました。

次に、平和記念公園を訪れました。公園内には、元安川という川が流れています。日光が反射してキラキラと光り、川沿いには沢山の笑顔、会話が飛び交っていました。しかし、80年前の夏、この川は今とはかけ離れた姿だったことを教えてくださいました。川は、爆心地から約150mの至近距離に位置し、強烈な爆風による建物の破壊、篠突く雨のようなガラスや破片。熱線によって、地表温度が3,000～4,000℃に達するなど、大きな被害に直面しました。たった数秒間の間に、多くの命が奪われました。かろうじて生き残った人々は、全身に火傷を負い、剥がれ落ちそうな皮膚を引きずりながら、熱さや喉の渇きを癒すために川へと、僅かに残る体力や希望で歩きました。川にたどり着くことができて、大量の放射性物質により、決



して死から逃れることはできませんでした。潮の満ち引きで流れが逆転し、何百体もの人々の青白い身体は行ったり来たりして流され、周りには悪臭が漂っていたそうです。そんな恐ろしい光景が一瞬にして目の前の川につくり出されたことに私は、言葉にできない恐怖を覚えました。

次に、広島平和記念資料館を訪れました。資料館には、胴体がドロドロにただれている人、炭と化した被爆者の持ち物・衣服、ずらりと並ぶ遺骨の写真など、原爆の恐ろしさを身に染みて感じるものが多く展示されていました。本当に地獄の光景が現実にあったことを再度確認したと共に、戦争・核兵器に対する恐怖、家族や友人の尊さなど、色んな感情がのしかかり、本当に貴重な時間を過ごすことができました。中でも特に心に残ったのは、目を治療中の男性の写真です。全身にひどい怪我を負っていて、顔の半分はひどく腫れ上がっていました。片目を確認するのに時間がかかるほどのものです。その男性はまっすぐな眼差しでこちらに視線を送っていました。その目には私たちが今日見て、聞いたものが全て鮮明に写し出されていたと思うと、胸がとても締め付けられました。



また、私たちと同年齢で被爆した方々の持ち物も展示してありました。学生服、弁当箱、帽子などが色を失い、炭を帯びていました。こんなにも若い、まだまだ続くはずだった人生が一瞬にして途絶えたことの実相を目の当たりにし、一気に戦争や原爆を自分ごととして考えられるようになりました。

今回の派遣で、私はとても価値ある時間を過ごすことができました。こうして実態を学ぶことができるのは、被爆者の方々が大切な遺品などを納品してくださり、私たち後世に鮮明な証拠を残してくれたおかげです。そして、私たちでは一生理解することのできない傷を負いながらも、命を手放すことなく、言葉にすることさえ辛いはずの体験を包み隠さず伝え続けてくださることに感謝し、思いに応えるべきだと思いました。

現在、刻一刻と被爆者がいない世界が近づいています。つまり、私たちの世代に完全にバトンが託されるのです。「二度とあの悲劇を繰り返さない」被爆者の方々の思いを何十年先でもそのままの形で継承し、一人一人の中に痕跡をとどめ、平和の波紋を広げ続けることが大切だと思います。今回の派遣で学んだことを心に留めて、自分の役割を果たしていきます。

平和へのバトン

岩倉中学校 吉 川 友 喜

私は岩倉市平和祈念派遣団の一員として、広島へ行きました。

1 日目は原爆ドーム・広島平和記念資料館へ行ったり、被爆者の方の話を聞いたりしました。原爆ドームでは、爆風の威力や放射線の強さを目の当たりにしました。資料館では、自分より小さい赤ちゃんが原爆の放射線により真っ黒になった姿の写真や、自分と同じくらいの年齢の子が持っていた黒焦げの弁当箱などが展示されていました。自分より遥かに小さい子や自分と同年くらいの子が被爆した姿を見て心が痛みました。被爆者体験講話では岡本忠さんが当時の事を話してくださりました。忠さんが被爆したのは1歳5ヶ月の頃でした。忠さんは爆心地から1.4kmの自宅で被爆しました。原爆が落ちた後、両手を前に出し、手や指先から皮膚を垂らしながら「水をくれ」と言って亡くなっていく人のことや、顔の皮膚が溶けて誰が誰だか分からなかったことを話されていました。その当時、薬品などの不足により、負傷者の治療が簡易的なものしかされていませんでした。忠さんも頭から出血していましたが、包帯を巻いただけの治療でした。



忠さんの話で心に残ったことが三つあります。一つ目は食料や衣服が足りない生活です。忠さんのお母さんは、食料や衣服を調達するために、近所の人などいろいろなところに頭を下げてもらっていたという話でした。頭を下げないと食料などが貰えないほど貧しい生活を送っていたことが分かりました。二つ目は忠さんの被爆後の傷です。被爆時にできた傷が目立つところにあるため、小学生の時は夏でも長袖を着たりして、傷を隠しながら生活していたと話されていました。三つ目は結婚と出産の悩みです。結婚相手や結婚相手の親御さんなどに被爆したことを話すと「結婚はできない」などと言われ、婚約破棄されたことがあったそうです。出産の時には放射線の影響が子供に出ないか心配だったと語っていました。

忠さんの話を聞いて、原爆は落ちた直後も、落ちて時間が経っても、身体的にも精神的にも一生残る傷を負わせる非人道的な道具で、持つべき物ではないし、使うべき物でもないことを改めて考えさせられま

した。

2日目は広島平和記念式典に参加しました。式典では、原爆死没者名簿奉納や、献花、黙祷、平和の鐘が鳴らされました。

広島市長の平和宣言で心に残った言葉があります。それは「『死んでもいいから水を飲ませてください!』と声を振り絞る少女に水をあげなかった事を悔やむ」という言葉です。死んでもいいから水を飲ませてくれという言葉は今の私たちにとって、とても理解し難い言葉ですが、当時の被爆者の方は体を大火傷し、喉が渴いて仕方がないという状況でこの言葉を口にしたのだと思います。その状況を考えるとどれだけ苦しかったかが痛いほど分かりました。式典に参加して心が打たれたことがあります。それは、式典に多くの海外の方が参加していたことです。日本で起きたことを海外の方々も、このようなことを起こさないようにと参加しているのを見て心を打たれました。さらに、会場には収まりきれないほどの参列者がいました。



式場の近くには原爆の子の像が建てられていて実際に見てきました。原爆の子の像は、2歳の時に被爆した佐々木禎子さんが10年後に白血病で亡くなったことをきっかけに、禎子さんの同級生達が「原爆で亡くなってしまった子供達のために慰霊碑を作ろう」と呼びかけてできた物です。禎子さんは12歳で亡くなっています。私たちより若い12歳の小学6年生の子が原爆のせいでまだ生きられていたはずなのに亡くなってしまったと知り、原爆が引き起こした悲しみを感じました。



広島平和祈念派遣に参加し、広島に行き学んだことはたくさんあります。今、世界には約12,000発もの原子爆弾が存在しています。その中で4,000発はすぐに使うことができます。被爆者体験講話や原爆ドーム、広島平和記念資料館の見学・式典への参列など、広島へ行きさまざまな貴重な体験をしてきました。これから私は、原爆だけではなく、戦争中に起きた東京大空襲や特攻隊、ひめゆり学徒隊など、全国で戦時中に起きた事を学びたいです。私はこの貴重な体験を生かし、私の周りの友達や家族に話をして平和のバトンを繋げていき、このような出来事が二度と起きないように平和な世の中に感謝しながら生活していきます。

原爆の怖さ、平和の尊さ

南部中学校 岩 岸 翔 大

今からちょうど 80 年前、戦争で原子爆弾が世界で初めて使われました。それは日本が戦争を終わらせるきっかけとなった恐ろしい爆弾です。現在、同じように恐ろしい爆弾を持つロシアが戦争をしていたり、中国も戦争をする可能性があると言われていたりしています。だからこそ、今、戦争や原爆の恐ろしさを知る必要があると感じ、広島派遣に参加しました。

まず、私たちは実際に原爆で被爆された岡本忠さんのお話を伺いました。岡本さんは 1 歳 5 ヶ月のときに被爆されたそうです。そのため、当時の記憶はほとんどなく、お話の多くはお母さんや叔父さんから聞いたものだと言っていました。しかし、記憶がなくても、今も体に残る生々しい傷跡が、原爆の被害を教えてくださいそうです。実際にその傷を見せていただきましたが、それだけでも原爆の威力を感じることができました。岡本さんから聞いた話はどれも信じられないものばかりでした。爆風で家が潰され、お母さんとやっとの思いで瓦礫から這い出してみると、道は建物の残骸や倒れた電柱でふさがれ、どちらに逃げればいいのか分からないほどだったそうです。

次に訪れた平和記念資料館では、さらに信じられない光景が広がっていました。建物を吹き飛ばすほどの爆風で、一瞬で命を落とした人もたくさんいたそうですが、建物や瓦礫が全身に突き刺さったり、何メートルも吹き飛ばされたりして致命傷を負い、しばらく生き続けた人もいました。そういう人たちは、より一層苦しむことになったそうです。

また、原爆の熱風で全身の皮膚がただれ、指の先から皮膚が垂れ下がりながら逃げ惑う人、全身にひどい火傷を負い「水、水」と叫んで亡くなった人、あまりの熱さに川に飛び込む人もいたそうです。そのため、川には油のようなものが浮かび、赤黒く変色していたことを知りました。

朝まで笑顔で溢れていたであろう広島が、一瞬にして絶望の聲で埋め尽くされ、地獄のような風景になったと考えると、胸が締め付けられました。しかし、正直、私はあまり実感が湧きませんでした。なぜなら、今の広島はきれいに整備され、笑顔で溢れる素晴らしい街だからです。しかし、被爆者が着ていたボロボロで血まみれの服、熱で変形し、ご飯が炭になったお弁当、あまりの威力に黒い影だけが残った人の姿を見ました。写真や実物が、原爆の恐ろしさや、信じられないような被害が現実にあったことを、私に強く訴えかけてきました。



原爆の怖さは、爆弾が落ちた瞬間だけではありませんでした。運よく生き残っても、放射線の影響でいつ白血病などの病気になるか分かりません。「被爆者だから」という理由で結婚を断られたり、ひどい差別を受けたりすることもありました。家も貴重品もすべてなくなり、貧しい生活を強いられ、就職も厳しかったそうです。あまりの辛さに精神を病んだり、家庭が離れ離れになったりしました。岡本さん自身も、幼い頃は家に電気を通すことができないほどの貧しい生活を送り、全身に残る傷も、差別を恐れて見せないようにしていたそうです。現在もがんを患うなど、原爆は今もなお、体を蝕み続けています。このように、何の罪もない人々に地獄を生み出す原子爆弾が、世界には1万発以上あり、すぐに使える状態の核兵器も数千発あると知り、なぜこの現実を知りながら、核兵器や武器を作り、戦争に備えているのかと、強い疑問を感じました。

岡本さんのように、差別を恐れて原爆の被害をあまり話したがない人もいます。しかし、「広島や長崎のような悲劇を二度と繰り返してほしくない」という思いから、語り続けてくれる人もいます。終戦から80年が経ち、被爆された方や戦争を経験された方がどんどん少なくなっています。だからこそ、今度は私たちの世代が、被爆者の方々から平和のバトンを受け継ぎ、次の世代、そしてまた次の世代へと語り継いでいくことが大切だと感じました。

一人の力は微々たるものです。しかし、平和記念公園のガイドさんから、こんなお話を聞きました。世界遺産として大切に保存されている原爆ドームですが、戦後は「あの日の悲劇を思い出してしまうから」という理由で、他の被爆建物と同じように取り壊すべきだという声がたくさんあったそうです。地獄のような体験をした人たちの気持ちを考えると、それは無理ありません。もし私がそこにいたら、保存に反対したかもしれません。しかし、一人の少女の日記が、その状況を一変させました。楳山ヒロ子さんという1歳の時に被爆し、15歳で原爆の影響で白血病で亡くなった女の子です。周りの人が「あのヒロ子が」と驚くほど活発な子でした。彼女の日記には「あの、いたいたい、産業奨励館だけがおそろべき原爆を世に訴えてくれるだろう」と書かれていたそうです。この一文がきっかけの一つとなり、原爆ドームは保存されることになりました。



このように、自分一人の力は小さくても、決して無力ではないという話を聞き、周りの人たちに、原爆の恐ろしさや、被爆された方々の悲惨さを粘り強く伝えていくことが、核兵器のない平和な世界につながると信じています。今、私にできることを頑張っていきたいです。

私は広島に行って、学んだことがたくさんあります。実際に行き、見て感じ聞いて学んだことを、一人でも多くの人に伝えられたらと思います。

1日目、まず私たちは平和公園に行きました。そこでは、原爆の子の像や原爆供養塔などを見ました。特に印象に残ったのは、広島平和都市記念碑です。家型埴輪の形がベースで、内部には石の箱があり、その中には名簿が入っています。その総数は128冊、原爆によって亡くなった344,306人の名前が書かれており、中には空白の名簿も1冊含まれています。これは、名前が分かっていない行方不明者のための名簿です。



平和資料館では、被爆時の衝撃で針が止まった時計や原爆の熱線によって曲がってしまった鉄筋、屋根などに使われていたトタン板が汚い布の塊のように溶けて変形したものなどを見て、最初は信じられませんでした。その他にも、目を背けたくなるような悲惨な写真やイラスト、服として原型を留めているように見えても背中側は完全に無くなっている服が展示されて



ており、私は驚きと同時に恐怖を覚えました。一つ一つ見ていくうちに被爆時の様子、戦争の愚かさ、悲惨さが伝わってきました。また、被爆者講話で、被爆された岡本さんからその当時の詳しいお話を聞きました。そこでは「自分は被爆した時の記憶は残っていないが、この被爆した傷は残った。左腕の傷跡はたった1つの被爆の証」とおっしゃっていました。被爆したところが目立ちやすい場所で、中学生の頃は左腕の被爆した傷を見られることが恥ずかしく、長袖などで隠していたそうです。お話を聞きながら原爆の恐ろしさ、放射線の恐ろしさがひしひしと伝わってきました。最後に「現れるかもしれない放射線の影響に怯えながら暮らしている人が沢山いる、ヒバクシャを新たに増やしてはいけません。核兵器は人類の生存を脅かす最悪な爆弾で地球上にあってはいけません。」と語っていました。私はその言葉を聞いてヒバクシャを新たに増やさないためにはどうするべきか、自分にできることは何かということを深く考えようと思いました。

この後はグループに分かれ、平和記念公園内の慰霊碑やさまざまな場所を回

り、現地のガイドの方にクイズを交えながら多くのことを教えていただきました。特に印象に残ったのは、慰霊碑に込められたメッセージです。慰霊碑の中には被爆した在日韓国人のために建てられた慰霊碑もあり、その慰霊碑は韓国から持ってきた石でできており、カメのような見た目をした石像は祖国（韓国）がある方角を向いていました。常に水が流れている慰霊碑もありました。被爆当時はとても喉が渴いたのに、放射線を浴びた水しかなく水を飲んだら死んでしまうので、飲ませることができず「水を下さい、一口でいいので」と言いながら苦しんで亡くなった被爆者のためにつくられたそうです。私はそれを聞いたとき、悲しみで胸がいっぱいになりました。



2日目、広島県原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式典に出席しました。会場に入ると独特な緊張感に包まれていました。私は、広島市長の平和宣言が印象に残りました。広島市長の「自分よりも他者の立場を重視する考え方を優先することが大切である」という言葉を聞いたとき岡本さんの話を思い出しました。「戦争は人の心によって起きる」逆に戦争を終わらせるのもまた人の心だということも思いました。そして特に印象に残ったのはひろしま平和の歌（合唱）です。この曲は広島市を世界平和の原点にしようという願いから、昭和22年8月に「平和祭」を挙げるにあたり、同年7月、主催団体である広島平和祭協会（会長 広島市長 浜井信三）が歌詞を公募し、重園よしお氏（中学校教師）の作品が選ばれ、山本秀氏（広島教育音楽連盟）が作曲しました。敬けんな祈りの中で厳粛に行われた第一回平和祭で高らかに合唱され、以後、平和記念式典で歌い継がれているその曲を私も歌いました。「国は世界の友に」という歌詞には、世界の人々が平和に手を繋いでこの曲を歌ってほしいという思いを感じられたような気がしました。

今回の広島平和記念派遣事業を通して戦争の悲惨さや核の脅威について、実感をもって学びました。広島での学びは単なる知識以上のものであり、平和の大切さを改めて認識し、「平和のために自分ができること」を真剣に考えることにつながりました。今後、戦争や紛争のない社会を作るためには、まず自分自身が日常生活の中で平和を守り、周囲の人々にその大切さを伝えていくことが重要だと感じています。具体的には、暴力や差別に関して無関心でなく、小さなことでも声をあげ、平和を大切にする行動を積み重ねたいと思います。また、学びを深め平和に関する知識を広めることで周りの人にもその重要性を伝えていきます。これからもこの貴重な体験を忘れずに、平和の実現に向けて自分にできることを続けていきたいと考えています。

今の当たり前にある平和に感謝を

南部中学校 田 辺 未 来

80 年前、広島に一発の原子爆弾が落ちました。原爆によって亡くなった方や放射線の影響で病気になるかもしれないという恐怖に苦しんでいる方たちがいます。戦後 80 年となり、戦争や原爆を経験した人は 10 万人を切りました。今私たちのような戦争を経験していない人たちがこの事実を知り、原爆のことを語り継いでいく必要があります。

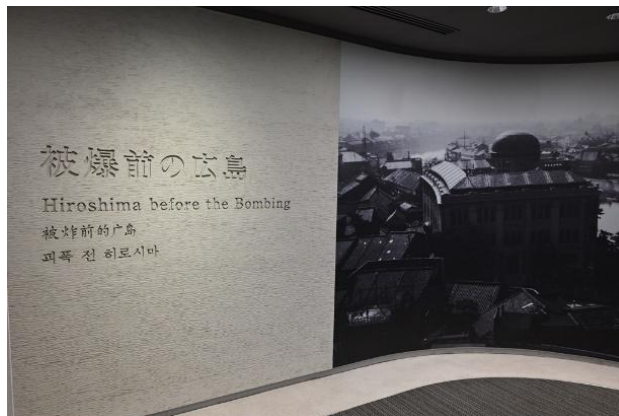
一日目、私たち派遣団は広島に着いて最初に被爆者さんの講話を聴きに行きました。お話を下さった方は「原爆の話は昔の話ではない」と話されました。今でも、世界には約 12,000 発も核兵器があり、今すぐ発射可能な核兵器は約 2,000 発もあるということです。今、何らかの理由でどこかにまた核兵器が落ち、たく



さんの犠牲者を出す可能性があるということを想像したとき、私は鳥肌が立ってとても怖かったです。私が小学生のころ、原爆が落ちた後の広島の絵を見た時に、とても怖かったのを覚えています。皮膚がただれて顔の区別がつかない人のようなものが、火の海の中で水を求めている絵は一生忘れられないものでした。そして、それが今でも起こりうる可能性があることを知り、私はより一層今回の派遣で原爆の悲惨さをみんなに知ってもらいたいと強く思いました。被害者講話の後、平和記念公園をガイドさんに説明してもらいながらまわりました。原爆が落ちる前の平和記念公園は賑やかな繁華街だったそうです。原爆が落ちなければ今も活気づいた街だったのかなと考えると胸が痛かったです。広島記念碑には、被爆し亡くなった方の名前が書かれている 127 冊の本と一冊の白紙の本が入っています。白紙の一冊は名前が分からなかった人のための本です。名前が分かっている人も遺族の方が見つかっていない人たちもたくさんいました。



平和記念公園を散策した後は、平和記念資料館を見学しました。資料館のはじめは広島の前爆と被爆後の街の写真が壁一面に映っていました。被爆前の写真は人通りが多くたくさんの建物がありました。被爆後の写真を見ると家も電柱も跡形もありませんでした。一発の原爆が上空で爆発し、賑やかだった街を静かな場所にしたということを考えた時、なんとも言えぬ怖さがありました。また、放射線によって肌触りが変わった瓦を実際に触ることができ、つるつるだった瓦の肌触りがざらざらと何か異物のようなものを触った感じになっていて、触ったときは鳥肌が立ちました。そして、資料館にはとても多くの人々が来ていました。日本人も多かったのですが、外国の方々もとても多かった印象でした。資料館にきた方々は、真剣に説明を読んでいたたり、家族と戦争について話していたりして、平和について一生懸命に考えているように見えました。世界では戦争や紛争が絶えないですが、その中でも平和を強く願っている人がたくさんいるということが分かり、自分も資料を真剣に読み、友達と話し合うことにより、一層平和への思いを強くしました。



二日目は広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式典に参加させていただきました。平和記念公園に朝早く着いた時、たくさんの人々で席が埋まっていて、外で立って参加している方も多く、とても身が引き締まり、緊張しました。2025



年8月5日午前8時15分、平和の鐘が鳴り響きました。目を閉じれば、それまで学んだ戦時下の苦しさや被爆者の心身の傷、尊い戦没者の命が心の中を巡りました。こうして黙祷を捧げることは、世代や国籍を問わず、戦没者へ思いを届ける手段なのだと思います。

「当たり前」という言葉はとても脆いものだと思います。私たちは「当たり前」にある平和を毎日生きています。しかし、80年前の広島「当たり前」の平和は、一発の原爆により奪われ今も心身を蝕み続けています。このことを話で聞くだけでなく、直接自分の目や肌で感じ、日々の「当たり前」に感謝し、原爆の怖さを語り継ぐことが、私たちの未来に核兵器のない平和な世界を作る鍵だと私は強く感じました。

平和な今を生きるために

南部中学校 久 野 そよ香

1945 年 8 月 6 日、午前 8 時 15 分、広島に世界で初めて原子爆弾が落とされました。戦争の絶えない今、原子爆弾によって起こってしまった悲劇を知ることとは、これからの未来に繋がる重要なことなのではないでしょうか。明るく活気に満ちた暮らしや、34 万を超える尊い命を奪ったのは、他でもない原子爆弾なのです。

私は岩倉市小中学生平和祈念派遣団の一員として広島を訪れ、被爆者の方の話を実際に聞くことができました。また、平和記念資料館や平和記念公園の見学を通し、原子爆弾の恐怖や平和の尊さを肌で感じる事ができました。

その中でも特に印象に残ったことが三つあります。

一つ目は、原爆ドームの姿とその背景についてです。平和記念公園にて、ガイドの方の説明とともに原子爆弾の威力や爆心地について学びました。この原爆ドームの写真を見ると、向かって右側の方が大きく損傷していることがわかります。なぜかという、爆心地が右側にあるからです。



このことを知ったとき、ずっと文字だけで学んできたことがとても身近なことに思え、衝撃が走りました。また、原子爆弾が投下されたことは決して想像の世界ではなく、実際に起きたことなのだと改めて実感しました。原子爆弾は、原爆ドーム南東約 160mにある島病院に投下されました。その病院の上空 600 mで爆発し、多くの命を奪いました。上空で爆発させたのは「熱線」「爆風」「放射線」の三つを最大限にするためだったということが分かっています。あまりにも非人道的な考えに、絶句してしまいました。

二つ目は、韓国人原爆犠牲者慰霊碑についてです。1910 年の日韓併合による、日本は朝鮮を植民地としていました。それにより、約 300 万人もの朝鮮人が強制連行され、労働力不足の補いとして働かされていました。その結果、約 5 万人が被爆し、約 3 万人が亡くなったとされています。原子爆弾



の投下から 25 年後の、1970 年にこの慰霊碑が建てられました。亀をかたどった台座の上に碑柱が建ち、その上には双竜が刻まれています。「死者の霊は亀の背に乗って昇天する」という故事にならい、亀の台座が造られたそうです。その亀は祖国である韓国(朝鮮)を向いており、被爆で祖国に帰れなかった多く

の魂をその背に乗せて昇天すると言われています。碑文は韓国語で書かれており、これまでに判明した 2,663 人の犠牲者の名前が刻まれています。身元不明者の多さや、他国で悲惨な目に合うという残酷さに、胸が締め付けられるような思いでした。

三つ目は、平和の鐘についてです。平和の鐘は、1964 年に核兵器と戦争のない世界の達成を目指す精神文化運動のシンボルとして、建てられました。鐘の表面には国境のない世界地図が彫られています。「世界は一つ」という意味が込められているそうです。平和記念式典の平和宣言で広島市長が仰っていた「国家は自国のみに専念して他国を無視してはならない」という言葉に通じるものがあるのではないかと思います。鐘楼の周辺にある池にハスが植えられています。被爆当時、火傷を負った人々がハスの葉で痛みをしのいだという話があり、その霊を慰めるために植えられたそうです。鐘楼はドーム型をしており、宇宙を象徴しています。しかし、なぜ宇宙を象徴する造りにしたのかは分かっていないそうです。平和の鐘がもつ「世界恒久平和」という理念には、国や民族、宗教を超えた願いが込められていると思います。だから、私は宇宙がもつ無限の広がりとその大きさを連想させるために、宇宙を象徴する造りにしたのではないかと考えました。



現在核保有国は 9 カ国、世界の核保有数は 12,241 (2025 年 1 月時点)だとされています。いつその発射ボタンが押されてしまうのかは誰にも分かりません。また繰り返されてしまうかもしれないという恐怖は、常に身近にあるのです。現在も戦争が行われている国は多数あります。平和とは程遠い暮らしをし、命の危機を感じている人が大勢います。そんな世界で良いのでしょうか。

広島平和祈念派遣を通し、原子爆弾の恐怖を改めて知ることができました。今ある当たり前が一瞬で壊される悲惨さは、計り知れないほどに苦痛であり、残酷であると思います。今を生きる全ての人に、この残酷さを知ってほしいと思いました。また、話し合うこと、相手の立場を考えること、広い視野で物事を見ることの大切さを身に染みて感じました。戦争や原子爆弾の投下など、実際に起こってしまった世界の出来事に関心をもつことが、世界の平和に繋がっていくのではないかと考えます。そのために今できることとは、できる限り多くの人に、今ある知識を伝えていくことだと思います。これ以上被爆者を出さないためにも、当たり前の日常が続いている今に感謝し、これからも生きていきたいです。

おわりに

戦後80年。節目を迎えた今年の夏は、例年以上の関心が広島に向けられていたのではないのでしょうか。実際に、テレビで戦後80年の特集が放送されていたり、書店で戦争関連の本を多く見かけたりと、普段の生活の中でも戦争について目にする機会が多くあったように感じます。誰しも「戦争は繰り返してはならない」と、戦争の悲惨さと平和の尊さについて考えたことはあるでしょう。しかし、80年前に起きたことはどこか他人事のようなものにも感じられます。今を生きる人々の中で、どれ程の人が戦争を自分事として捉えているのでしょうか。

平和祈念派遣事業では、戦争の事実と向き合うことで、原爆の恐怖がそこにあったのだと実感することができました。平和祈念資料館では、多くの遺品や被爆された方々の言葉から、一人一人が生きていた証を目の当たりにしました。想像を絶する資料を前にして、言葉にならない感情がこみ上げました。派遣団全員が戦争の悲惨さと平和の尊さを後世に伝えていかなくてはならないと気付かされた2日間となりました。

平和祈念式典で読み上げられた、子ども代表の二人の「One voice. たとえ一つの声でも、学んだ事実思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができるはずです。」という言葉が印象に残っています。平和について関心をもつこと、我々が式典や資料館に出向き、事実と向き合ったことは、平和への第一歩につながっているのだと強く実感することができました。

被爆者の岡本さんが、「平和のバトンをつないでほしい」と話されました。被爆者の高齢化が進む中、今の子どもたちが直接話を聞ける最後の世代です。今を生きる世代が未来を見据え、平和のバトンを後世に繋いでいくことが大切だと感じました。派遣事業に参加した団員一人一人が、広島で見聞きし、感じたことを自分事として捉え、友達や家族、そして一人でも多くの人に平和の大切さについて伝えていくこと。平和を願い、自分たちにできることを考え、実践できる大人に成長していくことを切に願います。



最後になりましたが、今回の平和派遣に際して、多大なご協力とご支援をいただいた関係者の皆様に心より感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

令和7年度 岩倉市小中学生平和祈念派遣団